

明けましておめでとうございます。

謹んで新年のお祝いを申し上げます。

皆様、どのようなお正月を過ごされましたか。家族で過ごした正月、実家のご両親と過ごした正月、恋人と一緒に過ごした正月或いはたった一人の正月等々、様々な正月があったことでしょう。私の正月は、実家に95歳の母を囲んで、兄弟家族（総勢18名）が集まって、ワイワイ騒いだものでした。

さて、2020年がスタートしました。今年は21世紀に入っの20年目という節目の年であり、東京オリンピック、パラリンピックが開催されます。スポーツの祭典という華々しい年になると強調される一方、11月には米国の大統領選挙があり、国際情勢に大きな影響が出る年になることでしょう。

人種・民族の異なる人達が相互理解・信頼を図るために、スポーツや文化活動を通じて交流を深めることは大変意義のあることです。今年はスポーツや文化活動が日本の地域社会の活性化に大きく貢献できることを願うばかりです。

昨年の秋、2年ぶりに休暇を取って、京都旅行をしました。ゆっくり京都の街中を散策でき、とても印象に残りました。10月下旬の紅葉にはまだ少し早い時期であったため、観光客もそれほど多くなく、行動し易くてよかったです。そして、この旅行を通じて、二つの大変ユニークな仏像を拝見することができました。

まず京都国立博物館内を見学していた際に、驚くべき仏像に出会いました。百聞は一見にしかずという通り、この写真をご覧ください

(https://www.kyohaku.go.jp/jp/theme/floor1_2/fl_2_koremade/post_3.html)。中国の南北朝時代に活躍した僧で、予言を行い、神通威神（じんずういじん）の術を行う（どんなことも自由になり、人知では計り知れない力を発揮する）宝誌和尚（ほうしおしょう：418～514年）の姿を表した像です。皇帝が和尚の肖像を書かせようと画家に命じたところ、和尚が自ら顔を割いて、中から十一面観音を出したので、絵が書けなかったという話がもとになっているそうです。私がパッと見て驚いたのは、仏像を彫って「顔の中から顔を出す」という発想でした。こんな仏像は他に類を見ないのではないのでしょうか。仏像は顔が命（いのち）と思っている私にとって、一つの顔から別な顔を出すというようなことは考えられなかったのです。ヒノキの一本造りで、ノミの跡が残る粗削りの出来栄も相当なインパクトがありました。

普段の生活をしているなかで、「あの人はあんな一面もあったんだ」と思うような際には、私にはこの仏像が頭に浮かびそうです。但し、悪い面に気がついた時には、十一面観音ではなく、イメージ的には不動明王の顔が浮かぶかも知れません（笑）。皆様もチャンスがあれば、是非一度この「宝誌和尚立像」をご覧ください。間違いなく、驚かれることでしょう。

次にこれまた驚いた仏像があります。それは永観堂禅林寺の本尊として伝えられている「阿弥陀如来立像」です。南禅寺に向かうタクシーのドライバーさん（女性）にどこかお勧めのお寺はありますかと聞いたところ、「少し歩きますが私のお勧めは永観堂」とのことでした。南禅寺の隣が永観堂ですので、それではと南禅寺を散策した後に、そのまま永観堂禅林寺へ向かいました。そこで見たのが、次の写真の仏像でした

(<http://eikando.or.jp/mikaeriamida.html>)。考えられますか、横を向いている阿弥陀如来様がいらっしゃるなんて。お寺もよくしたもので、正面からだけでなく、横から仏像が見える場所を用意しています。永観堂のHP には阿弥陀如来様が横を向いている理由が書かれていますが、第一印象はなんとなく「あっち向いてホイ」されたような感覚を持つのではないのでしょうか。本尊が横を向いている。。。これまたびっくりな発想です。それも向いた側（つまり左側）の肩を少し下げて、今まさにその仕草をしている瞬間を演出しているように思えるのです。通常この仏像は「みかえり阿弥陀」様と呼ばれているようですが、私はこの仏像を「見返り美人の阿弥陀様」と呼んでいます。この仏像も必見です。

今回の旅行の第一の目的は、比叡山延暦寺の根本中堂に行くことでした。はるか昔に訪れた時、荘厳な静けさの中での根本中堂の圧倒的な存在感に強烈な印象を受けたことが忘れられず、今一度同様な感動を味わうことができればというのが動機でした。残念ながら、根本中堂は平成28年から約10年の年月をかける大改修の最中でした。根本中堂を外から眺めるといふ当初の目的は達成できなかったものの、それでも内部は十分参拝できましたので、有難かったです。

比叡山延暦寺は伝教大師最澄が建てたお寺です。最澄は天台宗の「法華一乗」の教え（大乘の教え）を日本に広めたお坊さんです。僧侶への教育方針等を記述した「山家学生式^{さんげがくしょうしき}」の中に、有名な「一隅を照らす」という文言があります。「己を忘れて、他を利するのは慈悲の極みなり」（つまり、「忘己利他」の精神（社会に尽くす））を理解して、「一隅を照らせ」（社会を照らす人になれ）ということでしょう。皆さんもご存知の「不滅の法灯」（現在までの1200年以上、一度も消えることなく灯されているともしび）はここにありません。油も芯も常に補充され、1200年以上も灯し続けてきた意味は、最澄の考えを同様に末長く教え伝えよということの表れでしょう。「明らけく後の仏の御世までも光り伝えよ法の灯」と謳われています。

最澄が、19歳（或いは20歳）の時、東大寺で正式な僧になったにもかかわらず、すぐ東大寺を出て、比叡山にこもり修学修行に励んだ時に、自ら誓願したと言われている「願文^{がんもん}」という所信声明的な文章があります。エリートコースを辿れるのに、わざわざ山に籠もって修行する最澄の思いは相当なものがあります（ただ、この文章は最澄の死後に弟子が書いた「叡山大師伝」に載せられていたもので、弱冠20歳程度の最澄が実際に記述したものかどうかは判明しないそうです）。

この願文は最澄の決意表明と言えます。若き青年がこれからの進むべき方向を自ら宣言したのです。人生の無情、虚しさを感じながら、仏教的な輪廻のなかで、「人として生まれたことの有り難さとその生の短さを踏まえて、それでも善いことを行おう」と表現しています。そして、5つの誓いを行います。その中の5つ目が「三際中間。所修功德。獨不受己身。普回施有識。悉皆令得無上菩提」（（過去・未来・現在の）三際において修める功德を私独りで己が身に受けることなく、あまねく意識ある者すべてに廻らし施して、悉く皆が無上菩薩を得られるようにする）というものです。凄い宣言ですね。そして、このことを生涯にわたって実践していくのですから。最澄は、時の天皇、桓武天皇を動かし、確固たる地位を確保し、彼の死後弟子達がしっかり延暦寺を支え、仏教を学ぶ総本山にまで築き上げました。法然、親鸞、栄西、道元、日蓮等々の日本の仏教を支えた高僧が皆、この比叡山で学んだのです。同時期の著名な僧、空海と比較されて、ちょっとかわいそうな面もある最澄ですが、彼が恵まれたのはその教えを引継ぎ、延暦寺を日本有数のお寺にした^{えんにん えんちん あんねん} 円仁、円珍、安然等の優秀な弟子達が多数いたことでしょう。

最澄は、「忘己利他」（己を忘れ他者を利する）という精神だけが、混迷を極めるこの世界を救う唯一の方法として考えていたと思います。これは現在の共生社会にもつながるものではないでしょうか。社会は他者との関係性で成り立っている以上、自分の主張のみを通すことはそもそも有り得ないのです。約1300年前も現在も同様なことを考えているということは何を意味しているのでしょうか。

- ① 人間社会の構造は時代が移っても基本的には変わらないので、同じ発想を繰り返す
- ② その間、様々な戦争を繰り返し、皆が自己の欲求を求めて来たことから、「忘己利他」なる考え方は結局人間社会では成り立たず、単なる「お題目」にしか過ぎない
- ③ 教育の不徹底さ（皆がこの考え方を理解するまで教育が浸透しないこと）がいつの時代も続いている。つまり、これからもこの状態は続く可能性がある

というようなことが、残念ながら挙げられるかもしれません。それらを全て知っていた最澄は、自らの「願文」を介して、「何度生まれて来ても、必ずやり遂げる」という強い意志を表明したと私には思えてなりません。

昨年11月にローマ法皇が38年ぶりに訪日され、長崎、広島を回られながら、核兵器廃絶のスピーチをされました（日本は唯一の被爆国ですが、核兵器禁止条約に署名していません）。世界中の様々なところで常に騒動や紛争が起こっているのは、人間社会の宿命とも言えます。西洋的な発想では、これらの騒動や紛争を根絶することは難しいのです。今まさに求められているのが、最澄のいう「忘己利他」のような考えではないでしょうか。最澄は、人材の育成に際して、学問と修業の両面で、素晴らしい力を発揮できる人を「国宝」として重要視しています。つまり、考え方がしっかりして、実際に行動に移せる人材を最優先しています。

整理しますと、「忘己利他」の考えのもとで「持続的な共生社会の実現」に向けて取り組むことが弊社のこれからの行動方針になるのでしょうか。頑張ります。

新年早々、長々と書いてしまい、大変失礼しました。引き続き倍旧のご厚情を賜りたく、お願い申し上げます。今年一年の皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

令和2年元旦

株式会社サイモンズ
代表取締役社長
齊川 満

